

れしものであらう。即ち著者は「私は兩體系の綜合において初めて眞正なる且つ完全な社會學の體系が建設さるゝもの」を考へざるを得ぬ。如何にして兩體系の綜合を企圖すべきであるか。その試論こそ正に本書の内容を成すものである」云つて、これを社會學組織論方法論の二方面より研究をすゝめ組織論に於ては「一方において基礎に即した社會學、他方に於て社會現象に即した社會學の二つの部門」に分ち「前者」に於ては「特殊社會學の領域を」又「後者」に於ては「綜合新社會學の領域を包容」せしめんとせしものである。而して方法論に於ては著者は「私は對象を方法を分離して考へ、凡ての方法は、如何なる對象にも適合するものを見る」云ひ又「私は社會的事象に就て一般化的方法の可能であることを説くが、この故に所謂個別化の方法を全然排除しようとするものでない」云つて前にも従來の兩説を融合せしめんことをされてゐる尤もそこには本書に引用されてある語句によつても知ることが出来る如く、ジンメル、フイーヤカント、ヴェーゼ、デュルケーム、ギディングス等の歐米社會學者の研究を

參照して著者の該博な知識を透徹せる研究が齎せる新しき多分の收獲を見ることが出来る。著者はかゝる見地に本論社會學内容論を社會(基礎)論と社會現象論に分ちて更に各篇を總説、本質論、構造論、法則論の四章として詳述せられてゐる。かくて本書は社會學入門の初學者に於つても亦社會學研究者に於つても致ふる所大なるものあるを信ず。(岩波書店發行定價壹圓半)(三枝樹紹介)

## 西洋哲學史 第一卷 出 隆 著

哲學の入門的研究には概論風の研究も必要であるが概論では哲學上の幾多の問題ごとに、多くの哲學者の思索の結果を列挙してあるから、一哲學者の思想が問題別に分斷される。その分斷された思想がその哲學者の全思想中に如何なる位置を占めるか、さうして起つたか、他に如何なる影響を與へたかといふやうな事は哲學史によらなければ理解しにくい。つまり哲學史の知識がないと、概論は理解しにくいのである。進んで何かの問題を研究し、何人かの思想を研究するこなるに、哲學史的知識が

一層必要となる。

従來我が國には邦文で書かれた西洋哲學史が少い。簡明なるものには名著がある。部分的特殊の範圍又は一學派或は一哲學者について記述したものにも名著が少くない。これらが夫れ々、學界に立派な貢獻をしてゐることは疑へないが、西洋哲學史全體を詳細に記述したものが殆きない。

出降氏著の「西洋哲學史」の第一巻が今般新しく公刊された。第一巻は二五八頁あるが、ソクラテス以前だけを取扱つてあるから非常に詳細に叙述されてゐる。全體のプログラムは豫告されてゐないが、恐らく將來續刊されて、ソクラテス以後最近までの哲學史の展開を詳細に叙述されるものと思はれる。

ソクラテス以前の哲學者の著述は今日残つてゐないのて研究史料は僅かにプラトン、アリストテレス等の著述の中に引用されたものや、歴史家が傳へた記録だけであるから、それから哲學史を組立てることは容易でない。ましてプラトン等の引用した語句は、もこの著者の意味

がプラトン等の思想によつて變形されてゐることもあるから、それを元へ戻すことも容易ならぬ仕事である。その上ギリシャ語を正しく理解して、哲學史的に正しく研究することは、歐米の諸學者の貴重な研究を參考にするにしても尙日本人は確かに歐米人より割が悪い。

本書はこの困難を戦ひつゝ、ギリシャ詩人の神話的思索から哲學の生れた事情を究明し次にタレスより後、イオニアの諸學者の物活論的思想の展開を明らかにし、轉じて道德宗教に對する學的反省の起りを説き、それより同じく道德宗教に關し學的に思索しかつ宗教的修行を積んだピタゴラス派を説いて、その數論哲學を闡明し、次にこれが影響をうけて、これを超越したバルメニデスの不變唯一の「有」の思想の哲學史的地位を審らかにし、その學派を述べ、進んでエムペドクレス以下の多元論者を論じ、バルメニデスの否定した生滅變化の「有」思想を調和に關する思想の發展を記して、最後はデモクリトスの原子論による唯物論の一大體系が建設されたことで説明が終つてゐる。

本書は哲學者個人々々の思想を中心に哲學思想全般の展開を出来るだけ詳かに探求してある。常に哲學者の殘した語句の斷片や所傳の正しい理解を得ることに努め、思索に影響した文化史的背景を明かにするに共に、哲學者個人の個性に本づく特質をも審らかにし、各哲學者のオリヂナルを究明し、かつ一の思想から他の思索への進展を確實に把握しようとしてある。嘗にソクラテス以前だけでなく、後世への影響を見逃してない。従つて正確な解釋を得るためには、冗漫に陥ることも簡單にして誤解を招く弊に陥るを戒しめ、詳しくかつしつかり解剖剖判することに努力してある故、史的知識を與へるに共に、哲學する事の訓練をも與へうるであらう。間々從來の通説の非を正してあるのは、内外先進學者のバイロットの功も多いであらうが、右の如き用意で、根本的に深く正しく研究された結果だと思はれる。

固有名詞や學語は成るべくギリシヤ語で統一し、かつ普通に行はれてゐるドイツ語風の發音でなく、ギリシヤ語の正しい發音を片假名で示してあるのは結構である。

しかも綴を羅馬字で示してあるのは簡便を旨としたものであらう。只往々にして羅馬字の綴を或語の初出の場合にも示してないことがあるが、必ず示して戴きたい。學語の譯に出来るだけ純國語を使つてあるのも一見識であるが、冗漫に流れる弊をば免れないであらう。巻頭に地圖を添へてあるのは深切であるが、欲を言へば索引や年表も添へていたゞきたいものである。

最後に本書には文化史背景が量的には可なり詳しく説かれてゐるが主として哲學發生地たるイオニア地方に止り、それ以外は哲學者の傳記の説明に見えてゐる位なもので、全篇を通じて言へば影がうすいかと思ふ。私の偏見かも知れないが、讀者の理解を助ける爲に、ギリシヤの政治經濟的事情、例へばポリス即ち一都市が一國を形づくつてゐる事とか、市民は奴隸を多く使つて時間的に十分のスコレー即ち閑暇を持つてゐた事なきを卷首に先づ述べて置きそれと聯絡をこつて、後章を述べて行かれたら、文化史的背景がもつて生きて來るだらうと思ふ私はそれを望んでゐる一人である。(啓明社發行、定價貳圓半)(高橋紹介)